



Title	孤立環境で日本語学習を継続するための「学習者の役割」とは—シリア人日本語学習者の学習経験を通して—
Author(s)	Ramadan, Heba Mahran
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96178
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (ラマダン・ヘバ・マフラン)		
論文題名	孤立環境で日本語学習を継続するための「学習者の役割」とは -シリア人日本語学習者の学習経験を通して-	
論文内容の要旨		
<p>言語学習における「教師の役割」は非常に重要である。しかし、国家情勢や自然災害などで周辺の国々や関係国との協力が難しく、日本とは物理的・文化的・心的距離が遠く、日本語・日本文化があまり知られていない地域として孤立しているような学習環境（以下「孤立環境」とする）では、教師が少なく、教科を担当する人材の専門性も低いなど、量・質ともに課題を抱えていることが多い。そのため、教師の本来の役割をどれほど果たせるかは疑問である。そのため、学習者が「教師本来の役割」を享受することは困難である。</p> <p>そこで、本研究では、孤立環境における学習者の役割がどのようなものであるかを明らかにする。そのために以下の2つの課題を設定した。</p> <p>研究課題1：調査協力者ごとの学習経験をTEM図によって明らかにし、学習プロセスを分析することによって学習者の役割にどのような要因が関わっているのかを明らかにする。</p> <p>研究課題2：研究課題1で明らかになった要因に基づいて、調査協力者の学習者の役割を明らかにする。</p> <p>論文は全8章であり、以下構成について述べる。</p> <p>第1章では、問題意識や本研究の背景として教師の役割の有無による学習者への影響と学習者が自主的な行動を起こす必要性を指摘した。一般に、学習者は本来、自身の日本語学習の目的に向かって学習を進めていくものであり、教師は学習者がその学習目的を達成できるようにサポートする役割を持つ。恵まれた教育環境、つまり、教師が量・質ともに充実している環境で学習する学習者は、教師が自身の役割を果たすことで自分の学習を効果的に進めることができる。一方、孤立環境では、先に述べたように教師が全くいないか、いたとしても人数的に少ない。そして教師の専門性が十分なレベルに達していない場合もある。こういった場合には、学習者自身が「教師本来の役割」を肩代わりしなければならない状況になると思われる。孤立環境の一つであるシリアのように教師が少ないところでは、上述した役割を全て教師が果たしているとは限らない。そのため、学習者は自分でこの役割を担う必要性が出てくると考えられる。</p> <p>本研究で学習者の役割に注目する理由は、従来の日本語学習に関する研究ではこの点があまり注目されていなかったからである。孤立環境に該当しない国や地域では当たり前だと思われていることが、シリアではそうではない場合がある。「当たり前」だと思われていることの具体例としては（質の上でも、人数の上でも）十分な教師がいる状況や、日本語の文法や表現などを調べる方法がネット検索を含め豊富にある状況である。しかし、シリアでは先述したように教師が不足しているうえ、ネット環境が不十分であるためにインターネットに接続できないことが頻繁に起こるなど、これらの「当たり前」を享受できない。また、筆者の経験を述べれば、2016年、当時筆者が所属していたダマスカス大学日本語日本文学科が、ある日本語教育機関から何冊もの書籍を援助として受け取った時期があった。しかし、当時は教材の不足よりも教師の不在が深刻であり、特にネイティブ教師の存在が切望されていた。教材を十分に活用できる人材がいない以上、寄贈された書籍がどれほど役に立つかは疑問に残る。そういう状況だったため、シリアの学習者は他の手段でこうした不足を補わなければならない。すなわち、学習者自身が「当たり前」の「教師本来の役割」を背負わなければならないということである。本研究では、これを「学習者の役割」と捉える。</p> <p>筆者と同じような状況にある人々が住む「孤立環境」においては、「学習者の役割」は非常に重要な要素であり、もっと注目される必要があると考えられる。そのため、本論文では「学習者の役割」という言葉をキーワードにして論じた。本研究において、「学習者の役割」とは、「ある学習状況や学習環境において学習者が果たす機能、あるいはその『一部』」を指し、さらに、「学習者が援助を受けずとも、学習者自身が自分の学習のための行動を実際に行うこと」であると定義する。</p>		

第2章では、本研究の理論的枠組みとなるクラントン（1999）の教師の役割とDeci & Ryan（1985、2000）の自己決定理論、シャンク＆ジマーマン（2007）の自己調整学習理論などについて説明し、また、福島・イヴァノヴァ（2006）や市嶋（2016）、ショリナ（2017）などをもとに、孤立環境の日本語教師と日本語学習者の状況について整理した。そして、学習者オートノミーと学習者の役割の違いについて論じ、本研究における学習者の役割の定義について再確認した。

第3章では、本研究における調査の概要、すなわち、調査協力者と調査方法と分析方法について示した。

まず、本研究の協力者は、日本語学習を継続してきたシリア人の学習者たちである。日本語を教育機関で専攻しているAとB、そして教育機関などには所属せず、独学で学んでいるCである。この3名の学習者にインタビュー調査を行った。3名とも8年～10年間と長年にわたって日本語学習を継続している点では共通しているが、日本語を学んだ機関や時期などの学習環境や、学習目的、日本語学習を始めたきっかけはそれぞれ異なっている。この3名の協力を得ることで、さまざまな学習経験を聞き取ることが可能となった。調査方法は、半構造化インタビューであり、分析の枠組みとしてはTEM（Trajectory Equifinality Model・複線径路等至性モデル）を用いた。

第4章ではTEM図を用いて各学習者の学習環境と学習に対する行動や姿勢との関係を明確にした。その学習経験の中から各学習者のモチベーションの変化を分析し、さらに、各時期における行動を観察することで学習プロセスを分析した。モチベーションの変化を分析した結果、AとBの日本語に対するモチベーションは時期によって変化が起きていたこと、しかし結果的に「目標を設定したこと」が日本語学習を継続できた要因であったことがわかった。Cの場合は、日本語に対するモチベーションは他の二人と同じく時期によって変化が起つたにも関わらず、モチベーションの種類が一貫して内発的動機づけだったことで、外的要因に左右されることなく日本語学習を継続できていたことが判明した。また、各学習者の学習プロセスを分析した結果からは、各学習者が自らモチベーションの方向性や度合をコントロールする自己調整学習を行っていたことが明らかになった。

第5章では、第4章で得た分析の結果に基づいて考察した。A、B、Cの3名がモチベーションを維持し、上昇させようとしていた要因としては、自己決定性の高い学習者であるためであったことが明らかになったが、3名とも、日本語学習の当初から自己決定性が高かったわけではない。特にAとBは、日本語学習の初段階では外的調整のモチベーションを持っていたが、学習が進むにつれて、モチベーションの種類に変化が見られるようになった。この変化の背後にあった要因は、自己決定性の強さが異なっていたことであるということが判明した。

また、各学習者の自己調整学習の発達度合が異なるということもわかった。その要因として、自己調整学習の発達度合は学習者オートノミーに関わる学習者の特性と強く関係していることが判明した。協力者AとBには、学習者特性の「価値観・信念」が関わっていた。彼らには「日本語を勉強すればいい仕事を見つけることができる」という信念が存在しており、この信念により、日本語に対するモチベーションを維持・上昇しようとしていた。また、協力者Cの場合は日本語学習そのものが楽しいという、「興味・関心」の学習者特性を持っていたことが判明した。孤立環境の一つであるシリアにいる彼らは、戦争下の特殊な状況の中で何度もモチベーションの上下を繰り返しながらも学習を続けることができたといえる。その重要な要因として、各学習者が「価値観・信念」や「興味・関心」という学習者特性を持っていたことが挙げられる。

第6章では、各学習者がどのような役割を担ったのかを明らかにするため、クラントン（1999）を参考にして考察を行った。

まず、学習者A、B、Cは自分の学習のために必要な学習内容に関わる情報をどう手に入ればいいのかを考え自分自身に「提供」したことから、「専門家」の役割を担ったと思われる。また、各学習者は、「計画者」として、自分の日本語学習のため、学習を通して自分がどのようなことを経験したいのかを考え、そのための準備をしてきた。各学習者が学習目標を設定していたことは特に「計画者」の役割に当てはまる。ただし、Aは明確な学習計画を立てることができなかつたために、この役割を担わなかつたと思われる。そして、「教授者」の役割に関しては、A、B、Cは自分の日本語学習に対して何をすべきかを指示、指導する役割を担っていた。次に、「ファシリテーター」のような役割としては、各学習者は自分の日本語学習のために何をすればいいのかを考え、自身のニーズに合わせ、学習モチベーションを維持または上昇させるのに、どのような目的を設定すればいいのかを、進度に応じてその都度考え、自分を励ましていた。続いて、「情報提供者」の役割に関しては、A、B、Cは、自身のニーズに応じて目標の達成に必要な情報を取得し、学習プロセスを自ら促進する役割を担った。さらに、学習者は自分が行った学習のプロセスにおいて目標に応じて計画を立てたり、自己評価を行ったりと「学習管理者」としての役割も担っていた。ただし、Aは自身の日本語学習に対して積極的に評価を行っていなかつたため、この役割を担つていなかつたと思われる。最後に、「省察的実践者」の役割に関しては、各学習者が自分の日本語学習を客観的に振り返り、振り返った内容を自分の日本語学習に活かしていったことがわかる。よって3名とも「省察的実践者」の

役割を部分的に担ったということができるが、実践の理論を展開するプロセスを踏むまでには、3名の学習者とも至らなかつたと思われる。

以上を踏まえて、孤立環境における学習者の役割とは、自身の日本語学習に対して「専門家」、「計画者」、「教授者」、「ファシリテーター」、「情報提供者」、「学習管理者」及び「省察的実践者」の7つの役割を担うことであることがわかつた。本研究において筆者が考察する限りでは、学習者が担つた役割は本来の教師の役割と完全にイコールではない。しかしながら、孤立環境の学習者は教師の不在を主なきっかけとして、個人で学習を続けるために本来であれば教師が果たすような役割を自ら担う必要が出てくるのではないかと考える。

第7章では、孤立環境にいる学習者に向けて本研究から得た結論をもとに、どのように日本語学習を継続していくべきかについて提案した。①言語学習をしたい理由を考えること、②学習している言語を通して何を達成したいのかを考えること、学習を通してどのような学習を経験したいのか、そのための準備をすること、③言語学習を通してどのようなことを実現したいのかを考えること、④達成したい目標を実現するためにどのようにモチベーションを維持できるのかを意識して自分を励ますこと、⑤自分の学習ニーズを意識すること、⑥自分自身の学習進度がどのように進んでいるのかを意識すること、⑦以前の自分と現在の自分がどう変化したのかを測り、評価することといった7つの方法を提案した。

以上のように、第7章までの議論を通して、本研究は孤立環境における日本語学習者が教師の存在に頼ることなく、何をどのようにしていくべきか具体的に考え、自分自身で学習を遂行している姿を描き出した。

第8章では、終章として、本研究で得られた結果を総括し、残された課題として、困難な状況下で日本語学習が継続できる要因には、個々の学習者の特性や自律性だけでなく、アイデンティティが深く関わっていると予測されることを述べ、アイデンティティとモチベーション維持の関係についてさらに探る必要があることを示した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (RAMADAN HEBA MAHRAN)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主査	教授 小森 万里
	副査	教授 筒井 佐代
	副査	准教授 立川 真紀絵
	副査	准教授 福田 義昭
	副査	名誉教授 真嶋 潤子

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本とは物理的にも文化的にも心理的にも距離が遠く、地域内に日本語コミュニティもなく、教室外で日本語や日本文化との接触もない学習環境を孤立環境とし、とりわけ戦争により日本語を母語とする日本語教師がいなくなってしまうという厳しい学習環境にあるシリアにおいて、日本語学習者がどのように学習を継続しているのかを詳細に記述したものである。言語教育において本来であれば教師が担っている役割を、孤立環境では学習者自身が教師に代わって担わなければならない。このような役割を本論文では「学習者の役割」と呼び、孤立環境にあっても日本語学習を継続した学習者がどのような役割を担っていたのかを明らかにし、シリアのみならず孤立環境にある学習者への日本語教育や日本語学習への示唆を与えようとした意欲的な論文である。

本審査対象論文は全8章で構成されている。第1章は申請者の問題意識とシリアにおける日本語教育の状況について述べ、第2章で先行研究を概観し、第3章で調査概要について説明している。第4章は分析結果を示す章であり、調査協力者3人の学習経験をTEM図によって分析し、モチベーションの変化と自己調整学習プロセスを重要な要素として取り上げている。第5章では、モチベーションの変化の要因としての自己決定性と自己調整学習者としての発達度合いについて考察し、第6章では、本研究の結論として孤立環境における学習者の役割を明らかにしている。第7章ではそれまでの議論から得られた教育への示唆、第8章では本研究の意義と今後の課題について述べる流れとなっている。以下、章ごとに審査内容について報告する。

第1章では、本研究テーマの背景を述べた後、学習者の役割に注目する理由と孤立環境の定義、シリアにおける日本語学習者の状況についてまとめたうえで、孤立環境における学習者の役割を明らかにするという研究目的が述べられ、この研究目的を達成するための2つの研究課題（①調査協力者ごとの学習経験と学習プロセスの分析により学習者の役割に関わる要因を明らかにする、②研究課題①で明らかになった要因をもとに、調査協力者の学習者の役割を明らかにする）が提示されている。申請者の問題意識が明確に示された章であるといえる。

第2章では、孤立環境における日本語教師と日本語学習者がおかれている状況についてまとめ、また、本研究の理論的枠組みとして、教師の役割、モチベーション、自己調整学習、学習者特性などについて説明している。そして、学習者オートノミーと学習者の役割との違いについて論じ、申請者が明らかにしようとしているものは、従来のオートノミーという概念では捉えきれないものであることが主張されている。本論文では、周囲のリソースが容易に得られる状況になく、また、周囲からの援助を受けることを選択することができない状況にあるかどうかが両者の違いであり、そのような選択肢がない状況で学習者が担わざるを得ないものに対して学習者の役割という概念を使うのだと説明している。多くの先行研究を整理し、本研究で新たに提示したいと考える学習者の役割という概念とこれまでの研究で提示してきた概念との類似点と相違点を明確にしようとの試みがなされた章である。

第3章は調査方法について述べる章である。調査協力者はシリア人日本語学習者3人（A, B, C）で、AとBはシリアの高等教育機関で日本語を専門として学習しており、Cは趣味として日本語学習を続けている。いずれも8~10年の日本語学習経験をもつ。3人に対し、対面あるいはオンラインでの半構造化インタビューと書面でのフォローアップインタビューを行い、得られたデータからTEM図を作成し、作成したTEM図を各調査協力者に見せてトランスビューを行う、というデータ収集から分析までの過程が説明されている。調査方法と分析方法を明確に示し、分析者による省察可能性と読者による反証可能性を担保している。

第4章は分析結果が示されている。まず、3人のTEM図作成から「日本語学習を継続する」という等至点に達する

までの径路における分岐点、必須通過点、社会的方向づけと社会的助勢、そしてインタビューの中でみえてきたセカンド等至点が明らかとなった。申請者はこのような分析から学習経験（TEM図における径路）におけるモチベーションの変化と学習プロセスの重要性を指摘し、前者については、モチベーションが安定しない時期があつても自らモチベーションを上昇させ維持しようとしていたという共通点が3人にあることを、後者については、3人とも自己調整学習における予見段階、遂行段階、省察段階を繰り返しながら学習を継続していたことを明らかにした。戦争によりある日を境に日本語母語話者教師がいなくなる経験、国外への移動を余儀なくされる経験、移動先での教育機関への転入申請要件を満たすために何年もかけなければならない経験、日本語能力試験N1を取得しても奨学金選抜に何度も不合格となり日本留学を諦める経験など、厳しい学習環境においてもなお日本語学習を継続できた2つの要因を明らかにした点が、本章で成し得たことである。

第5章では、4章で明らかになったモチベーションの変化と自己調整学習プロセスを支えている要因について考察している。前者については、分析の枠組みとして自己決定性理論を用い、当初は自己決定性が高くななく外的調整によるモチベーションであつても学習目標の明確化によって自己決定性が高まりモチベーションを変化させていった学習者がいる一方で、日本語学習開始時から自己決定性が高く内発的調整によるモチベーションを維持し続けた学習者もいることを明らかにした。後者の自己調整学習プロセスについては、学習者によりその発達度合いが異なり、初步の自己調整学習者は一般的な遠い目標、低い自己効力感、定まらないプラン、自己評価の回避、マイナスの自己反応などの特徴があり、上達した自己調整学習者は階層的目標、高い自己効力感、過程の自己モニタリング、自己評価を求める、プラスの自己反応といった特徴があるということ、また、この発達度合いの違いには「価値観・信念」「興味・関心」という学習者特性が関わっていることが明らかにされ、先行研究を支持する結果となったことが論じられている。理論的枠組みに基づいた誠実な分析と考察の結果、孤立環境の日本語学習者の日本語学習における情意面を明らかにした具体的なデータとしての価値があると評価できる。

第6章では、クラントン（1999）の教師の役割を援用しつつ、調査協力者の学習経験と5章での自己決定性と自己調整学習の発達度合いの考察を通して、孤立環境における日本語学習者が「専門家」「計画者」「教授者」「ファシリテーター」「情報提供者」「学習管理者」「省察的実践者」という7つの役割を担っていたことを明らかにした。これらの役割は、学習環境が整っている「恵まれた」地域の学習者も自ら選んで担うこともでき、その点では孤立環境の学習者特有の役割とはいえないが、孤立環境における学習者はこれらの役割を担う以外の選択肢がない、という点が大きく異なることが強調されている。孤立環境における日本語学習者の経験をもち、現在の厳しい孤立環境の状況を知る立場である申請者に向けて語られたインタビューデータの分析を根拠に、この違いが大きいものであると主張されている点には説得力がある。

第7章では、第6章までの議論を踏まえた教育への示唆として、孤立環境での学習者が日本語学習を継続するための7つの方法を提案している。それは、①言語学習をしたい理由を考えること（専門家の役割）、②学習している言語を通して何を達成したいのか、学習を通してどのような経験をしたいのかを考え、その準備をすること（計画者の役割）、③言語学習を通してどのようなことを実現したいのかを考えること（教授者の役割）、④達成したい目標を実現するためにどのようにモチベーションを維持できるのかを意識して自分を励ますこと（ファシリテーターの役割）、⑤自分の学習ニーズを意識すること（情報提供者）、⑥自分自身の学習進度がどのように進んでいるのかを意識すること（学習管理者の役割）、⑦以前の自分と現在の自分がどう変化したのかを測り、評価すること（省察的実践者の役割）である。本研究で明らかになった学習者の役割から導き出した具体的な提案は、厳しい学習環境にある日本語学習者や日本語教師が参考にできるものであり、高く評価できる。

第8章では、学習者が担った役割は教師の役割と完全にイコールではないことに留意が必要であるという指摘がなされている。この指摘は、論文読者とりわけ日本国内の日本語教師が、孤立環境における日本語学習者の存在を忘れてはならず、孤立環境の学習者に届くような教師の役割は何かを考え、その役割を果たしていくかなければならないという大きな提言でもあるのではないかと考えさせられる指摘である。このような大きな示唆を与える論文であるという点で、本論文は日本語教育分野に資するものであると考えられる。

本論文には、どのような分野の研究としての論文であるのかという観点からの理論的背景の説明が不足している、先行研究への評価が明確に示されていない、データ分析の記述のしかたが読者にとってわかりにくい面がある等の難点はあるが、それらの点を考慮しても、孤立環境における日本語学習者についての具体的で詳細な資料を提示できたという点で高く評価できる。

以上のことから、本審査委員会は、全員一致で審査対象論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与する水準に達していると判断し、合格との結論に至った。